

論文概要書

周代史の研究―多様性の中の統一―

豊田 久

本論文は、周代における王朝の君主権の性格を、同時代史料である青銅器銘文（金文）を中心に研究したものである。

第一章 「成周王朝の君主権の構造について―「天命の膺受」者を中心に―」において、当時、成周王朝の開設がどのように考えられていたのか検討する。西周前期の青銅器銘文に載す王の誥文や命書に即して見ると、「文王の天命の膺受」と「武王の四方の匍有」（克殷）との二つのことをもって説かれていた。それが、後期には一つに合わさって、「文・武の天命の膺受、四方の匍有」となり、又「四方の匍有」に当たる部分は欠落して、「文・武の天命の膺受」となる場合もあった。又、この「四方の匍有」は、他の西周金文では「不廷方の率懷」「方蛮見せざるものなし」「蛮戎を司り、用て不廷方を幹す」のようにも換言され、多様な「方蛮」「蛮戎」らの来廷を云っている。

よって、これから判断すると、従来の考え方のように、この王朝の開設の根拠として、「文王」乃至「文・武」の「天命の膺受」（受命）だけを取り上げるのは、「文王の天命の膺受」と並置される「武王の四方の匍有」を見落とし、或いは「文王の天命の膺受、武王の四方の匍有」から「文・武の天命の膺受、四方の匍有」へ、そして「四方の匍有」が欠落して「文・武の天命の膺受」となる結論だけを取り上げたもので、元来武王の功績に比定された「四方の匍有」を見落とししたものと言わざるをえない。つまり、全体の構図が見えていないことになる。まずそのことをはじめて確認した。

そうすると、この王朝の開設が、一人だけでなく、文王と武王との二人で説かれていたのには、重要な意味があったことになる。そしてこの、「文・武」の後継者、即ち王朝の君主は、「天命の膺受」者と「四方の匍有」者との立場を「文・武」より基本的に受け継いだものと思われる（成周王朝の君主の二面性）。その一身にこの両方の立場をもっていたであろう。

又当時、王朝の君主がもっていた天子と王との二つの称号は、それぞれこの君主の二つの性格と結びつくものでなかったかと思われる。

つぎに、元来文王の功績に比定されたこの「天命の膺受」とは、又、「文王」の功績を解説する新出の史牆盤銘に「文王……匍有上下、迨受万邦」とも言ひ換えられていた。これによって、従来具体的な意味がよく分かっていなかった受命の内容を、西周金文に基づき、はじめてここに具体的に明らかにした。しかも、この文王の「天命の膺受」（受命）を解説して、「上下の匍有」と「迨受万邦」を云うことは、元来武王の功績に比定された「四方の匍有」と「上下の匍有」「四方の匍有」という、「上下」「四方」の対文になっており、「文・武」の後継者は、「上下」と「四方」との双方をそれぞれ偏く秩序立てる

者としての立場を受け継いだとも云うことが出来るであろう。周代研究の上で、このことをはじめて論述した。

そこで、以上のことを背景として、「天命の膺受」者としての具体的な内容を考えると、この王朝開設の条件として「四方の匭有」とワンセットになっている、「上下の匭有」における「上下」とは、「上下」諸神を指し、偏き「上下」諸神の祭祀の主体者であり、「万邦」又は「民」と「疆土」を合わせて天より受けた者、であつたと思われる。この天が「上下の匭有」を条件として、王朝の君主に与えた「万邦」や「民」と「疆土」とは、「四方」領域の「東国」「南国」などの蛮戎の人々やその領域を皆含んでいる。

つぎに、この「天命の膺受」者の地位の継承は、“文王”乃至“文・武”の受命と同時に、西周初より、代々の世襲と結びついた記述の多い「周邦」の受命という考え方によって、「天命の膺受」と血統による世襲主義とが結びつけられ、「周邦」の君主が受命者としての地位を世襲する道が開かれていたと考えられることを指摘した。

そして、この「天命の膺受」者としての地位の継承は、新たに即位する王（嗣天子王）に対する冊命文の中で、彼は前王の遺言として、「周邦」と「四方」（天下）とに対する二つの支配権を命じられていた（王権の二面性）。これは、西周金文にもその証を見ることが出来る。そうすると、彼は、先ず「周邦」の君となることを命じられた時、「周邦」が受命しているのであるから、彼は「天命の膺受」者（「上下の匭有」者）になつたと思える（血統による世襲主義との結合）。ついで「四方」（天下）の君となることを命じられた時、「四方の匭有」者になつたのであろう。

つぎの第二章「成周王朝と「成」の構造について―「成周」はなぜ「成」周と呼ばれたか―」においては、時代的背景からいえば、秦・漢王朝の開設が周代の「四方」にまで拡大した「中国」の“内”、即ち「天下」の支配を王朝成立の対象としていたのに対し、周は、「四方の匭有」者・武王の遺志によつて建設されたその「四方」の中心「中国」（成周、洛邑）の“外”の「外土」、即ち「中国」から見ていわば“外国”に当たる、多様な「不廷方」「方蛮」「蛮戎」や「東夷」「淮夷」らの住む「四方」（四国）領域の経営を王朝成立の対象としていた。即ちそれが、「四方の匭有」ということである。この時、「中国」とその王畿一帯は「内国」「内」と呼ばれている。この王朝成立の対象領域、即ち「東国」・「南国」など、武王の遺志によつて建設された「四方」（四国）経営のための「中国」の呼称は、国号的意味をもつ、ただ「周」だけではなくて、「成」の字をつけた「成」周と呼ばれた。この「成」周なる名称の「成」の意味について、従来の、どちらかといえば、「成」という文字そのものによつての解釈からではなく、当時の具体的史料たる西周青銅器銘文の「成」の字の用例を網羅的に集めてその用法を整理して、そこから検討する。

西周青銅器銘文に見える「成」の用例は、（１）「四方」（「四国」）の国際的紛争の収束に係る銘文上に現れる「成」の場合、（２）その他（裁判・契約例など）の銘文上に現れる「成」の場合、の大きく二つに分けられる。

この内、最も多く見える金文（１）例は、王朝の経営する「四方」領域における、「蛮戎」の国々が引き起こす「東国」・「南国」などでの国際的紛争を収束し、“乱”を鎮定した結果として、「成」や「有成」が終りに来る場合の「成」であつた。つまり、諸氏が成就・成功の義に解するこの「成」は、何をなしとげたのか、その「成」の対象となるものは何かといえ、共通してそれは、「中国」の“外”の「外土」「東国」・「南国」など

の「四方」(四国)の領域に起こる国際的紛争の収束の義に対して用いられているものであった。そうすると、西周青銅器銘文にある「成」の用例の中で、この金文(1)例の「成」の用法が周の「四方」経営に関するものであり、「四方の匄有」者・武王の遺志によって建設された、「四方の匄有」のその「四方」の中央としての「中国」の呼称と最も合致している。「成」周なる名称の「成」の意味は、当時の具体的史料からすると、この金文(1)例の用法に見える、国際的紛争の収束、「乱」の鎮定の成就・成功の意味での「成」の義ではなかったかと思えるのである。「成」周とは、「四方の匄有」者が経営したその「四方」領域を「成」する周、「成」した周などの意味となろう。

しかも、この金文(1)例の「成」の用法と同じものが、この「成」周(中国)の建設の意味を述べる『周書』五誥の一つ洛誥に見えていた。しかもその箇所は、「周公旦」が成王に説いて、周の経営領域の中央の地にあたるこの「中国」(「成」周)より「四方」(万邦)領域を治めれば、と云って、この金文(1)例の「休……有成」の型が直ちに下に接して現われているものであり、西周金文の用法にすべて合致していた。そこから洛誥の従来の読み方の誤りを訂正した。

又、金文(2)例の解釈は不確かなものであるが、そこに出てくる、契約や土地争いなどに見える、利害関係の裁定・調停を意味する「成」の解釈も、蛮夷による紛争と直接関係しなくても、巨視的に見れば、それ自身、紛争の収束の成就・成功を意味する「成」と同じ範疇に属するものであろう。

よって、「四方」領域の経営を王朝成立の対象としていた、「天命の膺受」者即ち「上下の匄有」者であり、「万邦」(「民」と「疆土」)の膺受者に対置される「四方の匄有」者とは、主に、「四方」(四国)の「蛮方」諸族が引き起こす国際的紛争の収束、「乱」の鎮定をなす者、又、「四方」の公平なる裁定者・調停者という性格を一般にもつものではなかったかと思えることを指摘した。

以上見て来たことから、「中国」を「成」周と呼んだ問題を時代的背景の上でとらえなおしてみると、この王朝では「中国」の「外」の「外土」、いわば「外国」にあたる「四方」(四国)領域を支配することが(「四方の匄有」)、王朝の成立を意味していた。そして、その「中国」のいわば国号は、国号的意味をもつ「周」だけではなくて、周に「成」の字をつけた「成」周であった。一方、皇帝制度の成立後の秦・漢王朝では、「中国」の「内」

(即ち「天下」)を支配することが(「天下の定有」)、王朝の成立を意味していたと考えられる。つまり、両者では、王朝成立の対象領域が「中国」の「外」に対するのと、「内」

に対するのという、基本的相違があったわけである。そして、「外国」から見た「中国」の国号は、秦・漢王朝の「中国」の国号が秦・漢と称されていたから、時代順に「中国」の国号を挙げてみれば、周・秦・漢ではなくて、「成」周・秦・漢となる。よって、周の場合、秦・漢の場合と異なり、「中国」の「外」の「外土」、いわば「外国」にあたる多様な「四方」(四国・万邦)領域の経営が王朝の成立を意味していたこと、そして、その「四方」領域の経営が「成」という言葉で云い表わされるものであったことからして、周王朝というより、一般的に「中国」の国号から、成周王朝という名称の方が、王朝成立の対象となる「四方」領域の経営を示唆し、中国史の上で、後の王朝との差異を示して、この王朝の基本的な性格をよく現わしているように思われることを論述した。

つぎに、第三章 「彤弓考―「四方の匄有」者(王)の性格について―」においては、

周初、宜侯封建の際に「王」によって賜与された「彤弓矢、旅弓矢」は、後の秦漢期以降までも、「九命之錫」の賜品の中に見えるものであった。この「彤弓矢、旅弓矢」について、西周金文に見えるその賜与の実態を集めて整理すると、主に三つに分類できる。即ち、「蛮方」の引き起こす争乱の収束に関して現れる場合、諸侯封建(移封、嗣封)の場合、「射礼」の場合、の三つである。この三者は、密接に結びついていたように思える。又、それらは、この王朝の成立を意味する「四方」(「四国」)経営とも、その背景において最大に結びついたものであったろう。

この「彤弓矢」を、蛮戎征討や「射礼」と同じく、諸侯の封建時にも受けていたことは、やはり、主として封建された地域周辺(封域外)の「蛮方」の「亂」(「王匿」・「王所亂」)の鎮定権をはじめから意圖したものであったと思える。諸侯封建を記す宜侯矢匭銘の冒頭に見える「東国」や「省」の西周金文での用例が、それぞれ「淮夷」「東夷」等の征討に関し、又、「四方」領域(「東国」・「南国」など)の巡守の義として頻見するのも、次の宜侯封建の冊命文と組み合わせて納得できるのである。南方重侯への「矢五(束)」の賜与の場合も、周辺地域の「蛮方」(淮夷)の「亂」の鎮定権を与えるものとして、これに類するものとなる。

又、同じく「彤弓矢」の賜与が見える蛮戎征討と射儀は、共に軍事的な性格をもつ。しかも、西周中期以降盛行した「射礼」の行なわれた射盧に類する、習射講武の處とされる周廟宣頤での蛮戎征討の功による獻俘、授餼、飲至、大賞の礼とともに、射盧と同じ「射礼」の行なわれた学宮と、蛮戎を伐った獻餼の礼との結びつきを示す文献も残されていた。一方、「射礼」と諸侯も弓射という甲兵のことと深く結びついたものであったろう。これらからすると、「四方の匭有」における、成周王朝における射礼(習射、学射をも含め)に関する重要性が浮かび上がってくることを指摘した。

ここで、西周金文に見える「彤弓矢」の賜与と云う視点に絞って見た以上の三者の結びつきは、多様な、叛服常なき「蛮方」諸族の居住する「四方」領域の経営者、即ち、この王朝における「四方の匭有」者(「王」)の性格をよく示すものであろう。又、この宜侯封建の際の、もう一方の「彤弓矢、旅弓矢」とワンセットとして、宜侯に賜われた祭祀に関する「匭匭・商匭」(「匭匭・圭瓚」の類)は、この王朝の君主のもつ、「四方の匭有」者に対置される「天命の膺受」者、つまり「上下の匭有」者即ち「上下」諸神の祭祀と、「民」と「疆土」を受けた者の側に関するものとなつて整合してくる。いわば、祀(祭祀)と戎(軍事)との関係にあるが、その他に賜与された、「賜土」と「在宜王人」・「奠七伯」・「庶人」などの人々は、この「受民、受疆土」に関係してくると思われる。

つぎに、第四章「成周王朝と「上下」考―「上下の匭有」者(天子)の性格について―」においては、この王朝の開設の条件である「上下の匭有」、即ち、偏き「上下」諸神の祭祀の最大の目標の意味について考える。そうすると、史牆盤銘を中心とした西周金文の解釈から、その祭祀によって得る多くの福祿の内、最大の目標が「豊年」即ち「年穀の豊穰」にあったことが分かる。つまり、民族(「東夷」・「淮夷」など)の枠を超え、どの民族にも共通する願いである、飢えないと云うことであることを、詳細に明らかにした。

「蛮方」諸族を皆含んだ、この多様な「万邦」(「四方」)領域の人々の共通の願いを最大の目標として偏く祭祀される「上下の匭有」における、この「上下」諸神の内容について考えると、およそ、周代に、同じ受命を考えた殷代以来の、主に祖先神、山川の神々、土

地神としての土(社)神や「四方」神としての方神など、多くの神々を指したものでなかったかと思われる。そしてその祭祀は、かなり典礼化したものであったろう。そしてそれに、周代に始まる血統(世襲)主義と結びついた、「治わせて万邦を受く」又は「民と疆土を受く」の「受命」思想が結び、「上下の匍有」を条件として、「万邦」(「四方」)の民と土地をまとめて天より得ていたのであろう。こうして、「武王」の功績に当たる、現実的な「四方の匍有」に対する王朝開設の一条件、「文王」の功績に当たる、「天命の膺受」の内容、即ち「上下を匍有して、治わせて萬邦を受く」が成立していたのではないかとと思われる。

この、偏く「上下」の神々を祭祀する、「豊年」即ち「年穀の豊穰」を最大の目標とする「上下の匍有」は、主に、「方蛮」「蛮戎」等の引き起こす国際的紛争の収束と云う、「形弓矢」的な「四方の匍有」と、「上下の匍有」「四方の匍有」と対文になりながら、民族の多様性をもった、独立的な「萬邦」(「四方」)世界を一つに統合するための、重要な一手段と考えられたのであろうことを指摘した。

つぎに、第五章 「成周王朝とその儀礼―王朝の君主と臣下、又は神との間の意思の伝達方法について―」においては、この王朝の君主のもつ両性格、即ち「四方の匍有」者としての現実的な命令、「上下の匍有」者としての「上下」諸神の祭祀の主体者という観点から、その君主と臣下(貴族)、または神々との間の意志の伝達方法について考え、その精神構造を詳しく検討した。前者では、西周中期以降の、特に官吏任命の冊命儀礼における伝達者の存在などの儀式次第を見て、又、命令の授受における儀礼において、王は堂上、臣下は堂下の廷上、王・臣下ともに堂上、又はともに堂下の廷上にいる、などの儀礼上の相違が、両者の関係から注目された。又、王が伝達者をおかぬ、受命者に対する自らの「親命」・「親賜」などの例は、西周金文に、特に、祭祀(神事)と軍事に関して見えていた。この王と臣下(貴族)との親しい接触を、祭祀(祀)と軍事(戎)をとともにする、異分子をも包み込む氏族制的貴族成員の姿から想像してみた。

しかし、命令と服従と云う君臣の義を明らかにする官吏任命の冊命儀礼においても、宗廟と云う宗教的権威を背景に行われていたし、又、典礼化されているが、受命者が祖先を祭るための作器をその場で云わしめられていた。このことは、そこから、当時の貴族の、氏族制的社会を秩序だてる理念的背景を読みとることが出来るであろう。

一方、王朝の君主と神々の間の意思の伝達方法も、王は直接神と通することはなかったのではないかとと思われる。史料的に乏しいが、この王朝の王は、そのことを主張していないように思える。ところで、殷王朝の王について、諸氏によつて、その性格から巫祝王とし、又「貞人が焼灼してできた卜兆を見て、その吉凶を判定しうる地上唯一人の存在」と考えられている。そうすると、殷王朝の王は、殷の時代的推移が問題となるかもしれないが、そのことを主張しているようである。もしそうであれば、この点に関して、同じ先秦王朝でも、殷と、これに替わった成周王朝における王の性格とは、少しく相違していたのではないかとと思われる。

つぎに、第六章 「西周金文に見える「家」について―婦人の婚姻そして祖先神、領地や軍事など―」においては、この王朝の君主は、西周金文や即位儀礼から見て、その「位」が対象とする「他邦」と並ぶ「周邦」と「四方」(「四国」)の君主となるほかに、彼自身が出自する「家」が重要な意味をもって語られていた。即ち「王家」、「王」の云う「我

家」の「家」である。この「家」の用例を、西周金文で見ると、いわば私的な婚姻夫婦、嫡妻が意識されており、又、その「家」は祖先神の中でとらえられ、その他、直接経営する領地等が、「王家」で云えば「畢」やおそらく「奠」の地が、この「家」と結びついて出て来る。

当時、多くの婦人が活躍していたが、公的な、王朝の開設者「文王・武王」による「天命の膺受」と、「四方の匍有」という王朝の君主自身のもつ二つの性格や、君位継承儀礼の所においても見えなかった、「王」の婚姻夫婦、嫡妻がこの唯一人の「王」（「天子」）の公的行為を代行しており、それは「王」の恩寵とされ、「王」とその嫡妻の行為は同一視されて見えていた。その理由を、この「家」に基礎をおく一体化した婚姻夫婦と、この夫婦による「家」の祖先神（「先王」）の祭祀、そしてその祖先神（先王）自身が、公的な最高の權威の源泉である、天上にある、天の朝廷（「帝廷」天宮）における「天」の神（「上帝」）の左右身边に一緒に居て陟降すると云う、この三者の緊密な間柄から指摘した。「家」を調べることは、自然に女性と結びついたが、屢々西周金文に見える、婦人（女性）達の、この王朝における、民族の多様性をもった「萬邦」（「四方」、「方蛮」）世界を一つに統合するために果たした役割は大きかったようである。やがて、王権の衰微と共に、男性中心の、行政的官僚的な要素の強い、冊命形式金文が盛んに見えるようになる。

又、特に西周金文に見える臣下側の「家」についても、「王」の場合と同じ婦人や祖先神等との結びつきの外に、「家」（又は「室」）が所有するものとして多くの「田」や「牛、馬」等が見え、又、「家」（「室」）に属するものとして、「百工、臣妾」や、軍事的な「我西陽、東陽、僕馭、百工、牧、臣妾」とか、「僕庸、臣妾、小子室家」等が挙げられている。「王家」との重層的類似性が考えられる。

つぎに、第七章「成周王朝の君主とその位相―豊かさや安寧―」においては、この王朝の君主の性格のうち、「天命の膺受」の内容となる「上下の匍有」と結びつく、上に居る天の神から受けた「受民、受疆土」（受万邦）の内、「受民」の「民」について考えると、「東国」、「南国」等の「東夷」、「淮夷」等、多種多様な人々を皆含んでまとめて「民」と云っていた。従来「民」を多民族とする考え方は、きわめて希薄であつたように思われる。また、「受疆土」の「疆土」について考えると、経済生活の「豊かさ」を産み出す、土「田」（農耕地）や山林川澤等を指していた。一方の「四方の匍有」（四方を通い征す）は、「四方」（四国）の「南国」、「東国」等が引き起こす国際的争乱を鎮定し、「周邦」が与えた国際的な安寧秩序、いわば「平和」な状態を「四方」（四国）世界に作り出すことであつた。その意味で征伐的軍事的である。王朝の君主のもつ「民」に対する「徳」も、この二つの立場から見る事が出来る。即ち、「天命の膺受」者・文王の「受民、受疆土」と云う、「上下の匍有」即ち「豊年」の保証を条件として、天から受けた「受民」の「民」と、「四方の匍有」者・武王の「曠く厥の民を正す」（大孟鼎銘）と云う、征伐的な、「民を正す」の「民」の、「民」に対する二つの面からである。

よつて、「万邦」（四方）における多元的世界を是認した多様な人々の統合は、偏き「上下」の神々に祈られる「豊かさ」だけでも、偏き「四方」の安寧が意味する「平和」だけでもだめで、この両者が共に必要であると考えられ、一つでワンセットとなつていた。しかし、特に刮目すべきことは、「天命の膺受」が先にあり、飢えないと云う経済的「豊かさ」こそが第一に考えられていたことである。無論、「四方の匍有」の国際的紛争のない

安寧な状態とは養稷一体の關係にあり、いわば経済的“豊かさ”を、紛争のない“平和”が支えていたことになる。多民族が住む地球的規模で云えば、この特色にこそ、人類史的或いは東アジア的意味が、また、独立的な多民族を一つにまとめる為に人間が生み出した知恵があるように思われる（そしてそこにコスモロジーの世界が深く関わっていた）。

また、王朝開設の対象となる「上下」、「四方」の面から主に見ると、成周王朝の君主は、神々が陟降する空間部分（上下）の世界と、世俗的な平面部分（四方）の世界とを一つにまとめた、総合的な秩序者といえるかもしれない。「上下」は「受民、受疆土」（受万邦）や神々の生産的エネルギー（上下の匍有）と、「四方」は「帝廷」天宮を中心とする天の神（上帝）の世界に頼り配した、下の地上の中心を占める「中国」（成周）や方位と密接に關係していたと思えることを、明らかにした。

即位儀礼について見ると、君主の位を象徴する具体的な物としての祭器の圭瓊の類（介圭、同瑁）は、それによつて「先王」を祭る、宗廟の嗣、宗廟の祭主となることを意味していたのであろう。そのことは、上の「帝廷」即ち天の神（上帝）の左右に居て上下する「先王」の神霊を介して、“年穀の豊穰”即ち“豊かさ”をもたらす天の神（上帝）と密接に結びついていた。また、新王と諸侯（邦君）が対面する朝見の儀では、受命のほか、殊に軍事的な「四方の匍有」（方蛮 見せざるなし）の擁護が命じられていた。これらに、宇宙の中でその場にあつて、性格を殊にする、成周王朝の君主（天子と王）の位相が見えるのである。